

子ども・青年の発達と教育

## 学びを共有する中で、理論と実践の 深化を

飛田 登美夫

### はじめに

今年度は、小・中・高・大の教員を中心に約15名の参加者があった。その中には、孫への学びを深めるための参加など、本分科会の幅広さがある。又、今大会の記念講演をされた片岡洋子さんも参加され、積極的な意見と問題提起があり討議が深まった。最初に、共同研究者の内島貞雄さんから、これまでの経過と昨年の討議についての報告を受けた。

①小学校での「学級崩壊」状況での報告が10年近く続く中でも「子どもは変わるのだ」という発達可能性に懸けて実践を追求し素晴らしい学級を創造した。その過程で「クレイマー」と揶揄される保護者が担任への支

援者が変わってきた報告。

②多様な問題を抱えた子ども達の言動の中に、不安感や困り感が存在するが、そうした感覚・感情を共有する大切さが確認されてきたこと。

③稚内での子ども達の豊かな成長を願う小・中の優れた実践。それを支える地域や教職員組合のねばり強い取り組みの報告。

④若者への自立支援や就労支援の公的機関が少ない中で、YMCAでは適切なカリキュラムの設定、丁寧な進路指導、卒業後のフォローアップなどの貴重な報告。

⑤高教組養護教諭部会の「性に関するトラブル事例」の報告は思春期の大切な時期に、人間としての発達と性的行為の望ましい知識理解の不十分さが広がり大きな課題であること。

### 一 レポートの概要

(1)

人間的な思いや考えを持てる授業を  
く新学習指導要領本格実施の中でく

伊達市立稀府小学校 佐茂 厚美さん

《新学習指導要領体制で学校は》新学習指導要領（以下

要領と記す) 本格実施となった小学校は、子どもも教職員も息苦しさを増している。西胆振のいくつかの学校例では

- 「入学したばかりの1年生の子が、私、がんばってるんです。でも疲れてるんです」と言い、何日も続けて保健室にやってきた。
- 4月の参観日で2つのクラスの授業を観た教務主任が「この学年問題だなあ」と言った。理由を聞くと「1組と2組で授業の流し方が違う」と指摘した
- 後輩教員が校内の授業研究会をやることになり何が悩みかを聞くと「子どもが発言してくれないんです」とのこと。

そこで、管理職も含めて全員で授業づくりを話し合った。何度も指導案を練り直して授業をしたところ、子どもたちは文章から考えられる主人公の気持ちをしっかりと読み取った。その日は指導主事も研究会に参加した。主事は「この教材の指導項目は、気持ちを読み取ることではない」と発言した。時系列を間違わずに読み進めるようにすることだと言う。「誰がそんなことを決めたの?」と聞くと、要領の解説書と教科書の指導書を持ち出してきた。組合の各職場の実態交流では似たようなことがどんどん出てくる。子どもも教職員も時間に追われ、微に入り細にわたる「指導」の中、自分の頭で考えて行動する喜びを奪われている。子どもの人間的成長と発達が奪われようとしているのではないかという危機感でいっぱいである。

《言語事項》要領は全ての教科に言語事項を入れた。胆振の小学校の研究テーマも「伝え合う〇〇の授業」といったものが多い。人間は言語を通して思考するのだから、一概にはマイナスとは言えないかもしれない。しかし、実態の中では子どもたちがじつくりと思考を重ね、丁寧に伝え合うことができるのか、はなはだ怪しい。実際「伝え合い」は「伝え方」を学ぶことに終始してしまい「学ぶこと」が「処理する」ことになってしまっているように思う。言語事項をどうとらえどう生かし、実践していくか。これは要領体制の中でも大切なことだと思う。そこで、子どもの実態から出発した。教材文と俳句の授業を通して『正しい答を出すのではなく、想いをふくらませる』を意図して。授業後の6年生の感想は「この授業をして、俳句でこんなに物語が作れるんだなあと思いました。私は今まで俳句でこんなに考えたことはなかったので、びっくりしました。いろいろな発想があつてとてもおもしろかったです」「算数など、正しく正解しないとならないけど、考えて他の人とはちがつていい、むしろちがう方がいいというのが、考える授業のいいところ。」その他にも何人も心のふくらみを表現した感想が報告されました。

【質疑では】• 子どもの実態から授業をつくる。その方向を目指す教師が少なくなっている• 微に入り細に入り、規

準がある学校が熱心という風潮がある・言語事項の中味の吟味が大切。伝え合いと言っているが、上手に「上意下達」になっていると思う。それでコミュニケーションと言えるのだろうか・インターネットに子どもの言葉が用意され、言葉だけが走る・自分の気持ちを言葉にできない子ども達の現状が進行している。トラブルが起きてても、調停で終わり大切な気持ちの解消や解決が無く、取り残されている・「市教委カリ」通りでないと気が済まないという若い教師が増えている。その背景には、教科書が分厚くなり、こなすだけで精一杯という状況がある。

## (2) 高校生の健康実態と将来展望

生活に根ざした学びとは何か

北海道高等学校 教諭 Y・Hさん

《からだはどうなっているか?》・健康診断からDMF(虫歯や歯痛)指数の比較では全国平均1・54本、全道平均2・20、本高校6・76。問診から、眠れない、食べられない(食べてもお菓子)・「子どものからだと心白書」から33年前から実施してきた実感調査、根強い実感(アレルギ―)(すぐ疲れた)と言う。新たな実感(うつの傾向、夜眠れない)仮説(自律神経系の発達不全と大脳前頭葉の発達不全)

《生活はどうなっているか?》・事例A。幼少時から両親による虐待があり、親戚の家で暮らしていた。そこも居づらくなり実家に戻った以降、2つを行き来する生活(学校は辞めさせる方向かとも)3年生の夏に家出。しばらく路上生活の後に見つかって家に帰るが学校は退学。退学後は出会い系サイトなどで知り合う不特定多数の男性と遊び歩く毎日。事例B。母子家庭だが、母親が交際相手と家出し数年間行方不明だったため祖母と暮らしていた。祖母の家は近所でも有名な汚れ屋敷。口数が少なくおとなしいので、人間関係も極々限られた中ではあったが、穏やかにまじめに過ごして、何とか3年間で卒業。就職が決まらずずっと家で過ごす毎日。

《学びはどうなっているか?》・子どもたちのつばやき。先生方が遠い。遠すぎて何言われても腹立つ。何も知らなくせに。先生のイヤミが嫌『○○さんなりがんばつてますね』『○○くんは今回は(提出物を)出してますね』『授業料タダになってるんだからちゃんとしなさい。人の税金で勉強してるんだからやらないならやめなさい』つて言われた。学習の自身に言及するつばやきは全くと言っていいほど聞かれない。聞こえてくるのは『わからない』ことに対する諦め「自尊心を砕かれた悲鳴」

《生活と学びをつなぐからだ》学びを希望に》Y先生の

報告は生徒への信頼を熱く伝える「養教はからだだから入っていく」とし健康診断を問い直す。「診断」で終わっていないか。「権利」として伝えていくか。「大切なからだ」というメッセージがこめられているか。生徒には丁寧な語りかけ↓生徒の心が開かれ、「あくそうですか」「ありがとうございました」などの敬語が返る。「からだ」を通してつながり合う、てまひまかけて！

《D子との生活》D子を家に迎える。最初の一週間ともかく助けてくれる人と場へ。地域のコミュニティレストランへ(就労訓練にもむけて。昼食もしっかり食べられる。若者自立塾の援助も。二週目く生活する。食べることに、家事をする。三週目く自立を目指して。アパート探し、夜間中学、若者サポートステーション(大学生がただで勉強を教えてくれる)D子が先生に「どんな報告が嬉しいの」「どんな報告だつて嬉しいよ」と。そして『ほんとに聡明な子なのに』と報告を結ばれた。

【質疑では】・高校では玄関で服そうチェック↓排除↓退学という傾向もある・一養護教諭よりもソーシャルワーカーの働きであり既存施設をととも活用されている。歯科医が虐待やネグレクトを伝えキャッチしてくれている。共同研究者の富田さんは「U君がなぜ敬語になったのか。先生がいつも敬語で『どうですか。してください。それにU君が

呼応してくれたのでしようか。傷ついた生徒への尊厳への確認と回復」と賞賛された。

### (3) 普通高校における特別支援教育の取り組み(事例報告)

北広島西高等学校 大澤 信哉さん

本校における特別支援教育に関する校内研修会第1回「普通科教育における特別支援教育のあり方」(二〇〇九年実施) 第二回「特別支援教育(応用編)く発達障害のある生徒への実際的な援助方法と保護者との連携のあり方について(二〇一〇年実施) 第三回「本校における特別支援教育の取り組み(事例報告)」(冬季休業中実施予定)

事例①「何事も自分を特別視する男子生徒A」【経過】入学時く1年時。華奢な体つきで女性的な外見と物腰。顔を手や何かで隠すなど特異的な印象を与える。入学当初、クラスに不適應感を抱き宿泊研修をドタキャン。よく保健室に逃げ込む。六月頃から友人にも慣れ安定期に入るが、年度末にはクラス分け等の不安からか、頻繁に相談室に入りする。2年時四月当初不安定な状態が続く。数々の虚言で周囲を翻弄(身内に瀕死の者がいて早退したい。執拗なからかいやいじめを受けていると訴えるが時期や期間等もあいまい(学年集会を開く結果に) 学校祭での取組等の

自信や養護教諭の後押しと母親との懇談を経て、劇的な見学旅行への参加。しかし、その後もストレスや不安を募らせる。養護教諭の後押しや母親への要請を通して札幌医大小児科ころと発達外来に受診。心理検査等を受け「発達障害」の診断。母親と面談し今後の対応の検討。3年時、現在。担任、学年主任、係、養教等で検討し「特別ルール」で指導。周囲に顔の表情を見られずに済むという理由から日常的にマスクを着用する。夏休み、八月は安定。専門学校への進学決定【評価】①養護教諭の支えにより、学校生活に安心できる居場所や人間関係を得ることができた。個々の教員のがんばりとコーデイネートの成果②医療機関とのつながりにより社会に出てからも本人、保護者によりどころができた。保護者の信頼と外部機関との連携構築③1年時の早い段階で保護者や医療機関との連携があれば…。診断が出るまで様々な情報に振り回された④教師間の知識や理解に著しい差があった。

事例②「教室に入れなくなつて別室登校から立ち直つた女子生徒B」【経過】入学時、1年時。中学校の欠席が171日あり、就学そのものに不安があったが、引つ張つてくれる友人の支えも大きく、安定した学校生活を送る。2年時。進級後、親しい友人ができず疎外感を持つ。登校後に涙が溢れ家に戻る。日曜になると学校のことを考え気

持ちが落ち込む。五月から母親の送迎で保健室登校になる。九月と二月に北大で母子ともに面談を受ける。また、担任と係も出向き「社会不安障害」の可能性があるが、改善傾向であり診断の必要なしのアドバイスであった。3年時、現在。自力登校し集会にも参加する旨を担任に告げる。LHR等にも参加し定期試験も教室で受ける。成績は学年一位をキープし、指定校推薦で進学を目指している。

【評価】①担任の献身的な指導と外部機関との連携で焦りのない指導ができた。②クラス分けの際の配慮に欠けた。

【質疑では】・困りきつている生徒を深く理解する力や困り感に沿った眼差しの大切さ・生徒の実態に対し、引き継ぎのありようを詰める・問題の共有のあり方として、報告を受け、解つたような状況で終わりやすい。そこから、新たな実践への展望に繋ぐ必要がある。

#### (4) 臨床教育的アプローチにもとづく学習指導実践

##### と記録

「新自由主義・消費資本主義と原子力発電」

##### の授業

江別高等学校 池田 孝司さん

《悩み、模索した授業づくりまでの日々》どう授業化していくか、とても悩んだ3・11後の日々。単純な語り・教え込みではダメではないかという想い。六月に行われた小出

裕章さんの講演でようやく授業化の方向が見えた。「大人としての責任」これが授業化の土台になった。授業テーマを、電力を大量消費し、自己の快楽(満足)を充足することを「幸せ」とする消費資本主義・新自由主義の生き方に触れる形で設定する。情緒的理想論を超えた、原発・エネルギー政策の検討へ。

《生活と結びつく学習・論議を》原発維持、推進派の生徒には生真面目な生徒が多く、脱原発派には自分の(快楽)生活と結びつけずに主張する生徒が多く含まれることが予想され、両者の思い・生活をぶつけあう(対話)することが必要だと考えた。

《生徒の声から》ちよつとずつ話し合ったりしながら、ゆつくりエネルギーも変えていく方が、みんな協力とか我慢してくれると想います。原子力発電をどうするのかは、やっぱり偉い人たちじゃなくて、日本のみんなで決めるべきです。だって、偉い人のもつとすごい倍の人が日本にいて生きている。だから、偉い人だけで決めるようなことじやないと想います。

《臨床教育的学習指導実践記録》日本の教育実践記録の質の低下には深刻なものがあり、教師の指導した内容のみで「実践報告」としてしまい、子どもたちの姿が全く見えてこない。実践研究には役立つことのないものが中堅教

師も含めて増えてしまっている。本報告は、生徒(学習者)の生活現実・生活感情について記述しながら学習指導記録をまとめる形をとる。

《授業計画》学習指導要領の「現代社会と倫理」という大単元の中の「自然や科学技術と人間のかかわり」として実施。単元目標。倫理という科目内容から、原発についての説明は副次的なものとし、「不安感」と「快楽消費欲望」と(安心・社会的公正)意識を接合して考え深めるということを中心とし、その対話と考察が深まっていくこと。単元構成。①原子力発電と人生②原発のリスクは(不安と安全)③自然エネルギーの可能性は(現状・未来)④私たちの暮らしをどうするのか(快楽消費と社会的公正)⑤討論「原発、どうするのか」

《ディベート。原発どうするのか》原発推進派から「安全・快適」この便利になった生活の中で、私たちは心のどこかでそれを求めている。個人的には「快適な暮らし」をとりたい。

「新エネルギーの開発・設置に使う費用があるなら、原発の強化や安全性の追求に使うべきだと想う」段階的廃止派から「3割近くも原発に頼っている今、無くしたらどうなるのか」「快適な暮らしより、安全が第一だと想います。今、いきなり全部の原発を無くす必要はないと思う。少しずつ

自然エネルギーに替えていけばいい」脱原発派から「まず、どんなに快適だと言っても、安全でなくていいのかということが問われることだ」と思う。チェルノブイリの事故が世界中の人を脅かして、危ないと言われていたのに、何も解決できないというか。自然エネルギーとかを使った方がいい」（更に、疑問点・問題点・意見交流が続く）

《討論後の感想から》快適な暮らしは、安全・安心の上にあると思う。水力発電・火力発電の事故は対応できるが、原発だけはそうはいかない。火を消しにくい消防隊も自衛隊も皆死んでしまう。原発を残そうとしている人は、自分の身に何の変わりもないから残そうと考えている。自分のことじゃないから、何をしてもいいのかと思う。それで死んでもしかたないという考えは、正直、理解に苦しむ。人の命がなくなる危険性が1%でもあるものは、あっちゃいけぬ。人の命はそのくらい全部大事。何かについて考えるには、沢山の情報が必要と思う。結局、みんな似たような考えであるが、今すぐとかはやっぱ無理なのだろうか。何かをするには、我慢も必要だけど、今この自分の生活が変わっていくのは嫌だなあと思う。今回の原発事故のように、実際に危険な目に合わなければ、その原因を問題にしないのか。原発関連で働いている人たちはどうすればいい。理想論、綺麗ごとでは駄目。もっと現実的に考えなければ

ならない。そして、考える為には深く知らなければならぬと思う。普段は、友達とはそういう会話にはなかなかない。授業が話せる機会になった。みんなにとっても考えるきっかけになったと思う。まず、原発の知識を深く知ることが求められていることだと思えます。一番被害にないやすいのは大人じゃなくて、子どもだということもわかってほしい。今のことだけじゃなく、将来を生きていく子どもものことも考えて、原発の問題に触れてほしいと思います。事故の起こった日本が一番努力すべきなのに、無くそうという努力をしているように思えないのです。今の日本はおかしい。原爆の恐ろしさを一番知っているのは日本なのに、それでも安全だと言えることが恐ろしい。私は正直、原発について詳しく知っているわけではありません。ですが、日本で起こっていることなのに、日本よりもドイツの方が原発に対して、しっかりと向き合っているんじゃないかと思えました。

【質疑では】・今まで断片的な情報しかない中で、系統的な資料を提示してくれた。生徒たちはどこから準備したのか。インターネットと思われる（池田さん）・原発問題をディベートで取り扱うことはどうなのか・教師の中立性を大切にしているが生徒にはわかるのか・生徒に同調することもあるが、違う意見を言い切ることも大切ではないか

・レポートの趣旨が生徒の内面に働きかける臨床教育学的な位置づけを確認したい等、原発問題での教師の立ち位置についても、今後、論議を深めたいと思われた。

### (5) 田舎野高校最終報告

田舎野高校 中野 文夫さん

《はじめに》以前は道内でも屈指の困難校であった。赴任して一週間ほどしてネクタイを外していたら「生徒に制服指導しているので先生方もネクタイを」と生徒指導部長に怒られた。当時は徹底した服装指導など管理強化によって落ち着いてはいた。反面、生徒が妙に素直すぎるのと教職員が真面目すぎるのが気になった。「学校」というより「お役所」という印象。七年間で教職員も入れ替わり『ほどよいゆるさ』が生まれ学校らしくなった。

《最後の学校祭》七月に最後の学校祭。準備期間の二週間の間教員も生徒も大忙しだった。生徒のみならず保護者や旧PTA役員も焼き鳥や屋台を担当してくれた。格技場に特設の「田舎野高ヒストリールーム」に過去の生徒会誌や卒業アルバムが展示され多くの卒業生で賑わった。卒業生の田舎野町長が「これが私が編集した代の生徒会誌です」と、1時間近く解説してくださった。昼には2回、1000個ずつの餅まきを行い、約400名の方の参加。

以前は各部門で順位をつけて表彰していたが2・3学年が1クラスになり表彰はなくなった。しかし「最後に町の人たちに元気な姿を見せたい」という思いで、生徒たちは損得抜きで学校祭に取り組んだ。順位をつけて競争心を煽るよりも、目標をめざしてみんなが協力することの方がずっと教育的なんだと感じた。競争心⇨向上心ではないことをこの学校祭で確信した。

《今年唯一の4年生大学受験者Aを通して》本校に入学する生徒のほとんどは小中学校では先生方の手が入らなかった子どもである。逆に、伸び代を沢山残しており、入学してから少人数指導で力を伸ばす生徒が多い。小さな学校の良さを再認識したい。その中のAは、真面目に勉強するが、要領が悪く理解に時間がかかる。アナログ時計が今年の夏休みまで読めなかったそうだ。針の長短の違いが解らなかつたと言う。大学受験に必要な学力と、日常生活を営む学力はやはり別物なのだろう。でも、A子には受験の様々なプレッシャーからか、学校でリストカットをした。出された課題の多さに耐えきれなかつたようだ。そこで担任を軸に進路指導部及び全教員で課題量も調整する指導を組んだ。又、面接に係わる指導では、応答をノートに想定しながら書き出しているが、自分の言葉ではなく、インターネットからの引き写しが多く気になる。この問題は小学



校での調べ学習の時には「インターネット丸写し」の傾向がある。情報は沢山溢れているが、それを自分のことばに変換し、自分のものにする情報活用能力（リテラシー？）をつけていかないといつまで経っても情報に踊らされて真の「主権者」とはなれない

《おわりに》 田舎野高校で確信した3つの学びと2つの課題。①競争心と向上心は異なるものである②発達のもつれや障害のある生徒も、人と人のつながりの中で生かすことができる。③地域の人、外部の人と関わることで、学校がその魅力を発揮することができる①自分の学んだことを言葉で表現することを通じて深めていく学習能力の必要性②単なる社会的適応訓練に終わらず、自分で生きていく力をつけるキャリア教育の必要性

【質疑では】・小規模の学校の良さをゆたかに活用し、教育的な営みが発揮されている・卒業生や地域の方々との連帯と交流が息づいていて、今、失われつつある母校がある・生徒と教師の間に親密感や信頼感を十分に感じさせる実践である。

## 二 総括討論から

分科会の始めに原発の問題を含め、非常に困難な状況が

進行しているのじゃないか。片岡さんからも「今まで私たちが培ってきた教育的財産をブルトナーザーで壊して来る現状」という指摘もある中で、各報告を受け今後役に立てるべき成果と課題を確認したい。

【成果として】

◎各レポートが意図的・創造的な実践であり、一教師としても学校の総意の実践としても深く学ばされた。

◎現場は余りにも重く厳しい状況があるが、各報告と分科会参加者の一人ひとりの発言の想いがすごい。

◎凄まじい事例を、微笑みながら語れるスタンス。柔軟性とゆるやかなしたたかさに驚嘆。このことは、子どもが示す否定的要因を深い洞察から、背景を炙り出し、今求められている子どもも理解へ大きな示唆を与えている。

◎教育相談的な取り組みから、自立支援やソーシャルワーカー（深い学びを自分に課せながら）の働きになっている。（バーンアウトしないで欲しい）

◎学校でこそ持つ解放できる学び。そこから、自己肯定感に結びつける実践がある。

【課題として】

◎臨床教育の学びで進むが、授業でどう子どもたちを救うか、力を育てるかを深めたい。

◎調べ学習等でも「インターネット丸写し」的現状から、

自分の感情・意志を表現する場を意図的に追求する必要がある。

◎特別支援を特別支援にしない意識のあり方。そこを、子ども理解の多面性と位置づけてはどうか。

◎忙しくて、なかなか関わりの持てない実情があるが、タイプの違う教師同士が交流できる職員のあり方が必要。

◎T P Pが問題になっているが、北海道には非常に大きな影響をもたらす。そして、子どもたちの成長・発達にも係わる。

今年度は、レポート数と参加者が少なくなつた。共同研究者と司会者で協力し、より多くの参加者と、分科会の質的深化をめざしたい。